

堀越二郎（1903–1982）

堀越二郎（1903–1982）は藤岡で生まれ、日本で最も有名な航空技術者の 1 人になりました。彼特に、第二次世界大戦中に大活躍した戦闘機「零戦」を手がけたことで知られています。

男子生徒として、二郎は工学の適性を示し、彼の教師から一生懸命勉強するように勧められました。とにかく、彼は勤勉な学生で、学校に歩いている間も英語で書かれた本を読んでいました。彼はまた、妹の勉強を手伝うことも多く、優しかったと言われています。

航空訓練

1924 年、彼は東京帝国大学（現在の東京大学）の新しく設立された航空工学部に入学しました。1927 年に卒業後、後に三菱重工業となる会社に入社し、第二次世界大戦末期まで日本軍用の飛行機を生産していました。彼の雇用主は、水上飛行機のエンジニアリングについてさらに学ぶために、1929 年から 30 年にかけて彼をイギリス、ドイツ、およびアメリカに派遣しました。当時、日本の航空学は、アメリカやヨーロッパよりも約 30 年遅れていると広く考えられていました。堀越は、海外で学んだことを利用して、日本が技術的に追いつく助けとなりました。

帰国して 5 年以内のうちに、彼は名古屋の三菱チームのチーフエンジニアに任命され、シングルシートの低翼戦闘機を設計しました。何度か失敗した後、チームは Mitsubishi A5M（日本では Mitsubishi Navy Type 96 Carrier-based Fighter として知られる）の製造に成功し、1936 年に大量産を開始しました。

1940 年までに、二郎と彼のチームは A6M ゼロ、the Zero fighter（日本では零戦として一般に知られている）の設計を完成させ、それはすぐに世界で最も高性能な艦載戦闘機として有名になりました。彼のデザインは機能的で、操作性の高い航空機を生み出ただけではなく、魅力的でもありました。低い片持ち翼で、飛行中の鳥に似ていることがよく指摘されてきました。堀越自身は「機能的に優れたものは美しい」と語りました。

戦争が続く中、名古屋の大規模な爆撃と自身の体調不良により、次世代機の開発は中断された。

戦後のキャリア

堀越は、航空工学の業績が認められ、昭和 48 年に勲三等旭日小綬章を受章しました。1955 年に東京大学に入り、航空機の設計を教えました。また、20 世紀の日本で完全に設計・製作された旅客機 YS-11 の基本設計にも携わりました。その後、防衛大学校と日本大学で教鞭を執りました。

堀越は、航空工学の功績により、1973 年に旭日章第 3 級を受賞しました。零戦の開発を描いた 1970 年の回顧録の英訳版が、1981 年に『Eagles of Mitsubishi: The Story of Zero Fighter』として出版されました。また、1956 年に英語で出版された「Zero: The Story of Japan's Air War in the Pacific - As Seen by the Enemy」にも協力しました。彼の人生の架空のバージョンは、2013 年の宮崎駿のアニメーション映画「風立ちぬ」で語られています。